

<b>発表タイトル</b>	自然災害後博物館の役割—— 台湾の小林博物館を例として
<b>発表者所属名</b>	比較文化学専攻
<b>発表者氏名</b>	呂 怡屏 (LU, YIPING)

本発表は、自然災害後、改めて設置された台湾の小林（シャウリン）平埔族群博物館の展示の企画過程に着目し、その博物館が「誰のための博物館」なのかについて考察する。

博物館の役割の一つは、記憶を保存することである（陳 2007：48）。博物館の中には人類の文明や歴史の進展だけでなく、人類が共通に経験したトラウマや災害の記憶を保存する博物館もある。何のために、どのように展示するのかは博物館研究の重要な課題の一つである。

2009年8月8日に台湾を襲ったモラク台風は「八八水害」を起こした。それから五年が経ち、災害以前の生活と災害で命が奪われた人々を記念するために、今年8月に台湾高雄の五里埔（土砂災害に襲われ埋まれた小林村の隣）に小林博物館の常設展示がオープンした。

展示の企画は高雄市立歴史博物館のキュレータが担当し、一年の時間を費やして、文献資料を調査し、三つの村に分散して移住した元小林村の住民にインタビューを行った。そのやり取りの過程により、博物館のキュレータは展示のテーマを「家に帰ろう——小林村の物語」に定めた。展示は、災害前の小林村にあるメインストリート、忠義路を再現することを始め、生業と儀礼、台風と災害、および未来への展望の四つのコーナーから構成される。

現地にある博物館は、小林村の元の住民にとって、意義のある施設だと思われる。けれども、筆者のインタビューによると、現地の人たちは博物館の役割についてまだはっきり認識していなかった。さらに、あるインフォーマントは「悲しい記憶を思い出せるところへ行きたくない」ということもいった。

このような状況の中で、地域博物館としての小林博物館を、どのようにコミュニティの中で位置つけるのか、あるいはどのようにコミュニティの住民と連携するのか、この問題は小林博物館の今後にとって、重要な課題になるだろう。